

一、私先祖之儀、元和田九右衛門尉良清と申者にて、故有テ但州大屋谷ニ致蟄居、于時、伯州会见郡尾高城主杉原播磨守殿懇望直召ニ依、無余儀嫡孫玄蕃勝実本苗ヲ秘シ、地名ヲ取、大谷玄蕃と号、加勢ニ差出之処、惜も無程播磨守盛重公卒去、跡目論ヨリ、終ニハ断絶ニモ可及ニ付、暇乞捨、再但州江引取、隠士と成、其后永禄年中、玄蕃長男和田九右衛門勝宗ニ甥甚吉と申者有之、米子灘江引越住居為致、廻船家業ニ相営候所、越後国ヨリ帰帆之砌、与風竹嶋江漂流、甚吉全く嶋巡リ、越方等熟思致所、朝鮮国相隔事四拾里斗、人家更ニ無之、土産所務之品有之姿、弥渡海之勝手相考、同所ヨリ海上百五拾里斗日経、漸湊山下江帰帆、其頃、因伯御太守新太郎様御幼君にて、為御城代阿倍四郎五郎様御越之砌、早速御注進申上之処、右甚吉儀、江戸表江御召連、御帰府被為在、則御詮儀之上、奉達御上聞、元和四年竹嶋渡海御免之御奉書頂戴、同年ヨリ竹嶋渡海相始メ、凡七拾八年之間、無怠惰毎年渡海仕、尤御公儀江貢物上納ハ雖不仕と、誠ニ空居之嶋、甚吉見頭、日本之土地広、御式帳載之段、拔群之功と御称美。

因茲二三年振、又は八九年目ニ參勤。

公方様之独礼御目見被為仰付、其上御紋御時服・御熨斗目拝領、竹嶋渡海之船江は、御紋船印等拝領被為仰付、冥加之至。于時、元禄九年竹嶋渡海御制禁被為仰出、家業失、無是非出雲国江立去願差出候之処、御公儀江御由緒有之者、他国江引越参事御差留、追て被為思召在旨、先ハ米子表魚島間屋座口錢九右衛門一人為家録可被為下置之旨蒙仰、以御蔭、于今至、大谷家苗米府相続仕、難有仕合奉存候。且、享保三戊年十二月廿七日夜、土蔵出火にて、拝領之品其外代々江戸参府記録等、惜哉多分焼失、尤于今所持之品々猶焼残之書記之内、為規模由緒之次第、拙家世代之座ニ書頭置者也。

#### 九右衛門勝宗

於米子大谷家元祖是也。竹嶋渡海開祖ハ、勝宗甥甚吉也。具は別記有之、略す。尤竹嶋渡海村川差加ハ由緒、勝宗故有、折節御城代江伺公遂、村川市兵衛儀も由緒有之、於阿倍御館参会、于時、阿倍公御取持にて、市兵衛連名勝宗及出願、尤勝宗名前差出可然旨、阿倍公ヨリ御進メ雖有之と、勝宗未タ再武之志有之ゆへ、達て御断、則阿倍公御帰国之節、市兵衛・甚吉兩人御召連、則江府相詰、御訴訟申上、奉達御上聞、竹嶋渡海不可有異儀之旨、從御老中様御太守新太郎様江、以御奉書被為仰出、右御奉書頂戴仕、則元和四年より渡海発ル。具ハ別記有之、略す。如前記、勝宗儀未タ再武志有之故、発願より甥甚吉名前にて有之処、惜哉、甚吉於竹嶋ニ病死致し、暫ク懈怠、無余儀勝宗但州ヨリ家族共引移、渡海之儀相務ル事。尤本苗之和田ハ勿論、中古ノ大谷姓迄も秘し、甥甚吉同様、大屋九右衛門にて、継目仕、因茲、竹嶋へ渡海之由緒寄、勝宗於御公儀は二代目相当ル。甚吉他姓ノ人ニても無之、尤、嫡流不有之外戚等、具は別記有、略之。寛永十五年、西ノ御丸御材木御用被為仰付、難有奉畏入、寅二月右御用木為献上、市兵衛・九右衛門兩人共参府、則御目見被為仰付、首尾能相勤、兩人共御時服奉拝領仕頃は、乍恐御三代目之御將軍様御代之御事、并ニ西御丸御書院御床板御書棚板等之御用相勤候ニ付、道中御紋之御符驗御指札奉蒙御免至、于今所持仕候事。

從伯耆国米子、竹嶋先年船相渡之由候、然は、如其今度致渡海度之段、米子町人村川市兵衛・大屋甚吉申上付て、達上聞候之処、不可有異儀之旨、被仰出間、被得其意、渡海之儀可被仰付候。恐々謹言。

五月十六日

永井信濃守尚政

井上主計頭正就

土井大炊頭利勝

酒井雅楽頭忠世

松平新太郎殿

右勝宗江戸参府、御目見之年番候処、同人及老衰、殊更眼病ニ付、嫡子惣助為致参府事、于時御目見当日相成、前髪にてハ御例無之、俄於御殿中蘇鉄間ニ、阿倍公御差函を以、惣助元服、

名九右衛門と改号

御目見首尾能相勤、罷帰候節、阿倍公ヨリ勝宗江被下候御書面、左書頭置也。

卯月三日之来札披見、今度惣助罷下、遂面談候処、其方達者候得共、眼病眩無之由申ニ付、此度元服為致、九右衛門と名改、御老中江も差出、過廿八日首尾能致御目見候間、難有儀大慶可

# 竹嶋渡海由来記抜書

有之候。委細ハ惣助可為演説候。且又、下緒耆具贈給、欣然之至候。我等儀も、一段父子とも無事在候間、可御心安候。竹嶋江之用事、惣助ニ書付申談候。猶期後音候。恐々謹言。

六月二日

大屋九右衛門様

猶以、惣助於寔元、代々之名九右衛門と申上候間、其方名ヲ替、緩々と休息可然、委細は惣助ニ申含候。以上。

四月三日之一輪令披見候。然は、貴殿儀病氣ニ付て、為名代同姓惣助御下候。同苗四郎五郎肝煎ニて、首尾能御目見江被仕候間、可有恐悦候。随て、下緒大小耆具贈給、忝存候。将又、我等一類共、堅固相勤候。猶期後音之時候。恐々謹言。

阿倍忠右衛門正義在判

五月晦日

大屋九右衛門様

御通事

猶々、惣助儀、生付能御手前仕合と、我等兄弟共寄合申事候。可有御満足候。以上。

正月八日別紙之御状令披見候。去冬首尾能公方様江御目見江、難有被存候旨、尤候。我等儀も、弥無事在之事情。来春竹嶋へ船被相渡候旨、無事着岸之左右可承候。材木之儀、兩人江之書状申達候。次、重ては子息御目見ニ可被指越之由、令承候。一段可然候。無氣遣御越可有之候。猶期後音候。恐々謹言。

阿倍四郎五郎政重御書判

正月晦日

大屋九右衛門様

御返報

二代目九右衛門勝実

勝実、幼名惣助、於江府九右衛門と改号、及老年隱居シ、瀬兵衛と改。此惣助若年之時、父勝宗為名代江府江詰、前記如く首尾能御目見仕、其後数度御目見仕、則参府度毎記録有之処、焼失、尤寛文十一年亥五月廿八日御目見仕、并二延宝七年未七月参府、其翌八月御目見仕、右両度分献上之品、并二御役人様勤門控、左之通書頭、猶延宝九年西七月村川市兵衛参府之節、御達書ニも顕然たり。寛文十一年亥五月廿八日御目見仕砌、御勤門左之通。

御公方様江、献上箱肴

但、例之通竹嶋鮑

五百貝一折

酒井雅楽守様

酒井河内守様

阿倍豊後守様

稲葉美濃守様

久世大和守様

土屋但馬守様

板倉内膳守様

右御七人様江、竹嶋鮑五百入一折宛

土井能登守様

堀田備中守様

右、若御老中江、竹嶋鮑三百入一折宛

小笠原山城守様

戸田伊賀守様

本多長門守様

右、遠国御奉行江、竹嶋鮑三百入一折宛

# 竹嶋渡海由来記抜書

右寛文十一年亥五月廿八日、勝実御目見仕候砌、勤門控。  
一、竹嶋渡海中開発、甚吉より勝宗・勝実・勝信四代、各数度御目見仕候節、記録有之処、享保三年  
戌十二月廿七日土蔵出火之節、多分焼失、尤相残分左ニ書頭置もの也。

## 御目見御式次第御目録書

五月廿八日

一、如例月、御札相済

参勤之御札

綿式百把金馬代

松平肥前守

綿百把金馬代

松平主殿守

蠟燭二箱金馬代

松平筑前守

一、上杉弾正大弼在着ニ付、以使者蠟燭五箱二種一荷被差上之、使者銀馬代ヲ以、自分之御礼色  
部又四郎、終て御次之間伺公之面々、并内縁ニて、伯耆米子町人参上。

箱肴

大谷九右衛門

右終て、入御

一、勝実、延宝七年未七月参府、其翌八月御目見被仰付候。左之通。

御公方様江献上 竹嶋鮑五百貝入一折

酒井雅楽守様

酒井河内守様

稲葉美濃守様

大久保加賀守様

土井能登守様

堀田備中守様

右、御老中様江、竹嶋鮑五百貝入一折宛

松平因幡守様

石川美作守様

右、若御年寄様、竹嶋鮑三百入一折宛

板倉石見守様

松平山城守様

右、寺社奉行様此御兩所進物不納。

御公方様御茶道

星野道半公

鈴木道守公

各晒一反宛

右勝実代、寛文六年竹嶋渡海之船、朝鮮国釜山沖ニて及破船、尤、船頭・水主共無恙陸江游上、  
則朝鮮国所々ニて御馳走、順々送帰シ相成事、具別記有之、略す。尤、朝鮮国王より船頭・水主江  
餞別目録二通有之、于今致所持、則左書頭す也。

漂倭処別贈

頭倭一人

白米貳斗

白紙貳卷

從倭二十一名

白米各壹斗

白紙各壹卷

丙午九月日

巡察（花押）

漂倭二十一人

白米拾肆石拾斗

大口魚壹百拾尾

清酒貳拾貳瓶

# 竹嶋渡海由来記抜書

東芯式拾貳塊  
生鮮式拾貳束  
甘醬陸斗陸升

丙午十月日

際

一、筆申入候。大屋九右衛門当度磯竹江渡候船之内一艘、朝鮮国江被放、船は破損候得共、人ハ損し不申、釜山海より宗対馬殿江送届候由、対馬殿より殿様大坂御藏屋敷迄申来候由、右之様子対馬殿より言上之上を以、重て御左右可在之と聞へ申候間、追付様子可相聞候。無異儀罷戻して可在之候。右之者共、妻子行末不存、歎居可申候間、右之趣被仰聞候ハ、安堵可申候。此通、大屋江可被申渡候。恐々謹言。

十一月廿二日

荒内匠

御名乗御在判

坂川分左衛門殿  
大脇多左衛門殿

安倍四郎五郎様 酒井讃岐守

人々中

忠勝

昨日は、伯耆国町人大屋九右衛門私宅江参候付、御使被指添候。右之九右衛門儀、竹嶋へ船渡候旨、此頃罷帰候。例公方様江御目見仕候由、令得其意候。随て、貴殿儀、炎天之節毎日御普請場へ御出之儀、御大儀存事候。何も期面上之節候。恐惶謹言。

忠勝御在判

八月十五日

三代目九右衛門勝信

勝信代、延宝九年酉五月、御巡見様御宿仕、其節竹嶋之様子就御尋、御請書差出写。

一、大猷院様御代五拾年以前、阿倍四郎五郎様御取持を以、竹嶋拝領仕、其上親共より御目見迄被為仰付、難有奉存候事。

一、彼嶋へ年々船渡海鹿魚之油、并ニ串鮑所務仕事。

一、竹嶋へ隠岐国嶋後福浦より百里余可有御座由、海上之儀ニ御座候得共、慥ニハ知レ不申事。

一、竹嶋之廻拾里余御座候御事。

一、殿有院様御代、竹嶋之道筋廿町斗廻申候小嶋御座候。草木無御座岩山ニて御座候。廿五年以前、阿倍四郎五郎様御取持を以、拝領、則船渡海仕候。此小嶋ニても、海鹿魚油少宛所務仕候。右之小嶋へ、隠岐国嶋後福浦より海六拾里余も御座候事。

五月十三日

右之通、御請書仕候事。

右勝信、貞享貳年丑五月廿八日、乍恐公方様江御目見被為仰付候節、竹嶋鮑二箱献上仕候。尤、献上之為御残、御老中様方・御側御用人様方・若御年寄様方・寺社奉行様江も進上仕候ニ付、御側御用人松平右衛門太夫様より、御書被成下候。ケ様之類余夥所持仕候处、先年焼失仕候。尤、相残候御書翰之内、荒増如左。

一、筆申入候。其地江被参候付、串鮑三百入一箱持参之由、留主居之者共方より日光へ申越候。心付之通、祝着申候。尚、追て可申候間、不具候。恐惶謹言。

五月六日 松平右衛門太夫正綱

大谷九右衛門殿

参

追て申入候。

御目見之儀は、伊豆方へ申入候。以上。

松平右衛門太夫正綱

大谷九右衛門殿

# 竹嶋渡海由来記抜書

官所  
今朝は被相尋、殊串鮑五百入老箱預持参候。心付之通、令祝着候。令他出不能面談候。猶期面候。恐々謹言。  
八月十四日正綱御書判有ル。

態一筆令申候。其筋別状無之、各無事候哉、当御地御静謐、吾等も父子共ニ無恙有之候。然ハ、御代替遠国之衆中も、其方之様成衆も、何れも御目見致参府候間、相模守殿御在江戸之事候間、能時分ニて候。早々被致参府可然候。相模守殿御屋敷より使可有と存、如此候。恐々謹言。

阿倍四郎五郎

五月八日

大谷九右衛門様

八月五日御状忝披見、弥無事御入、就中竹嶋・松島江御越候船、無恙過六月帰朝旨、旁以目出、珍重御満足之段、令察候。梅檀板も御取寄候所、難風付て捨り申故、来春御申遣候半旨、被入御念儀候。且亦、我等儀堅固有之候。猶期後音時候。恐惶謹言。

大久保和泉守正朝御書判

十一月廿七日

大谷九右衛門様

村川市兵衛参府付て、御状并扇子一箱五本入贈給、過分至候。然ハ、御手前弥無為由、珍重此事候。且又、我等儀堅固、一類中無恙候間、可安御心候。随て、当春竹嶋へ渡海御申付候条、夏中可為帰帆旨、来春も船之越候由、全承知候。重て首尾能かいん存事候。内々申達候。百合草・海鹿之膽参着候は、可給候。御当地御静謐之段、市兵衛可有物語候。猶期後音之時候。恐々謹言。

大久保和泉守正朝御在判

七月晦日

大谷九右衛門様

四代目

九右衛門勝房

勝房七歳時、父勝信卒、別家藤兵衛後見、于時元禄六年、從御公儀被為召出、勝房未夕幼年、後見藤兵衛儀、九右衛門として差出候様被仰渡、奉畏、其翌七年甲戌春、藤兵衛仮ニ九右衛門と改名、江府へ相詰、則元禄七甲戌三月廿八日、例之通、公方様江御目見被為仰付、先格之通万々首尾克相勤罷帰、其節相勤申上候御屋鋪、左之通。

大久保加賀守様

秋本但馬守様

阿倍豊後守様

加藤佐渡守様

戸田山城守様

内藤丹波守様

土屋相模守様

松平弾正守様

右、御老中

右、若御年寄

柳沢出羽守様

本多紀伊守様

牧野備後守様

戸田能登守様

右

松浦老岐守様

右、寺社奉行

久世出雲守様

右、御奏者

右之通、首尾能相勤、罷帰、為褒美拝領之御熨斗目御服、則藤兵衛江讓、于今至、別家藤兵衛方重宝、具別記有、略之。殿様其頃御在江戸ニて、同四月朔日、例之通御目見被為仰付、首尾能相勤、其節之御役人様方、左之通。

荒尾志摩様御参府中

吉田平馬様

太田次左衛門様

御聴役右三人

御奏者

一、元禄七年、如例竹嶋渡海致之処、彼之嶋唐人大勢參入躰、此方より渡海之船中少人数にて、無扨帰国、其旨御達申上候処、從伯耆守様御公儀江御注進、御評議之上、其翌八年渡海船中鉄砲五拾挺・槍・太刀蒙御免、御威光を以、渡海致し候所、去年より亦唐人大勢竹嶋へ雖參居申と、此方之船湊へ漕入候処、唐人等俄ニ乗船、同嶋大坂浦へ退、于時唐人兩人陸相殘、耆人通辞有之、船頭共打寄遂吟味処、不埒之申分にて、不得止事、則彼唐人兩人共召捕、直ニ乗船、隱岐国迄帰帆、同所御出張御役人御穿鑿之上、津々浦々引船御差出、御嚴重之御手宛、無程米府湊へ帰帆、則伯耆守様江御達申上、追々江戸表御注進、暫唐人勝房へ御預、其後鳥府表へ唐人被召、船頭黒郎兵衛始、水主召連、勝房後見藤兵衛出府、唐人道中為警固、御組土加納弥右衛門様・尾関忠兵衛様、右御両所御出府、則鳥府表御吟味之上、唐人江府へ御引渡、則江戸表御穿鑿相濟、順々御贈歸と成ル。別記有之ゆへ、略之。

附り、連帰唐人名

アヒチャン  
トラエイ

右唐人取籠置候所、私宅之内ニ有之候所、及大破、諸道具等当時片付置有之事。

一、元禄九年、竹嶋渡海御制禁之旨、從御老中様因伯之太守伯耆守様江御奉書御到来、其書之写。

先年松平新太郎因州・伯州領地之節、相窺之伯州米子之町人村川市兵衛・大屋甚吉、竹嶋江渡海、至于今雖致漁候、向後竹嶋江渡海之儀御制禁可申付旨、被仰出之候。可被存其趣候。恐々謹言。

正月廿八日 土屋相模守

政直

戸田山城守

忠昌

阿倍豊後守

正武

大久保加賀守

忠朝

松平伯耆守殿

從伯耆守様、右御奉書を以、竹嶋渡海御制禁被仰渡、無是非御請申上ル。右濫觴、先達て連帰唐人贈歸以後、朝鮮国より竹嶋儀唐土地ニ相違無之由通達有之、頗ニ懇望、漸々二相成り、朝鮮国王より、竹嶋儀從往古日本御支配相違無之旨、則御証文御取附被遊、其上にて朝鮮国江御預ニ相成故、私共竹嶋渡海御制禁被為仰出候事。

付り、当時之御威光にては、中々朝鮮国王竹嶋懇望たり共、容易御任被為成間敷ものを、

乍恐常憲院様御代、御容子有之、御静謐不成御時節旁折悪敷ゆへ、御制禁被仰出とかや、惜ても無余仕合、先祖より聞伝て已、穴賢。

于時、勝房、竹嶋渡海御制禁以後、家業ヲ失ひ渡世難仕ニ付、雲州親類の方へ引越願差出候所、其段御太守様御不便ニ被為思召、殊ニ公方様江御由緒有之もの他所江難被遣、追て可被為思召在候間、他国出之儀、堅御差留被仰付、先ツ為取統料米子御城下魚鳥問屋座口銭、九右衛門一人之家録ニ可被仰付旨被仰渡、元禄九年以來奉蒙御国恩、家苗相統仕、難有仕合奉存候。右御憐愍被仰付旨、寛保年中勝房江府江相詰罷在候砌、御公儀寺社奉行様方江、具ニ達御聴候事、皆々様心感入候御仕向振と、御一同御意被為成候事。

一、勝房代、享保九年辰四月、從御公儀竹嶋渡海越方之儀、何角被為遊御尋ニ付、乍恐相模守様迄御請書仕差上、具別記有之、略之。

附り、江戸表御聞役小谷儀兵衛様御勤中御事、九右衛門より御答書、寛播磨守様江御差出

御座候趣、則小谷様之御来状之写ニ書頭御座候。其砌、九右衛門方御聞札之儀は、

御船手より被仰付候。則梶川蔵人様御勤中之御事。

一、殿様江御目見仕来、并江府へ先祖之者相詰罷在候節、御目見被仰付、并ニ參府中殿様御交代之節、

# 竹嶋渡海由来記抜書

御迎・御見立申上来り候御事、則御国之御用人様方より被下置候御切紙数通所持仕候内

大屋九右衛門様

河村彦十郎

蓮花寺五郎八

以手紙致啓上候。然は、明十五日四ツ時、出羽守逢可被申候間、御出候様被申付候条、如斯御座候。以上。

十一月十四日

大屋九右衛門殿

河村彦十郎

蓮花寺五郎八

猶以、五ツ時前ニ御出可有之候。以上。

以手紙令啓達候。明日御目見被仰付候間、五ツ時御座敷江可被罷出候。以上。

四月十九日

大屋九右衛門殿

河村彦十郎

蓮花寺五郎八

追啓、御発駕之節、御門前江被罷出候て勝手次第と被仰出候間、例之通可被罷出候。以上。

四月十九日

大屋九右衛門殿

河村彦十郎

蓮花寺五郎八

其方儀、明十五日四ツ時、御目見被仰付候間、可被出候。以上。

十二月十四日

一、大広院様御代、御在国之節、年頭御目見之儀奉願上候処、延享元年子八月廿二日御聴届被仰付候。御召状并御切紙、左之通。

大谷九右衛門殿

牛尾金右衛門

上村惣右衛門

御用之儀有之候間、唯今御館江可被出候。以上。

八月廿二日

大谷九右衛門殿

牛尾金右衛門

上村惣右衛門

追て申入候。此紙面昨晚可遣之処、夜ニ入候ゆへ、今日遣候。何分早々御屋敷へ可被出候。以上。

大谷九右衛門

其方儀、御在国之節、年頭御目見願之通被仰付候。

子八月廿二日

一、殿様より先祖之もの御紋乗服拝領被為仰付、難有奉頂戴仕、至于今、右御時服御上下・御帷子等所持仕居申上候。尤、何代以前之九右衛門奉頂戴候儀哉、前記御断申上候通、書類焼失ニ付、不分明、其内御服拝領為御礼出府仕候節、荒尾志摩様より先祖之もの被為下置候御書翰、右拝領之御時服相添所持、夫之写、左之通。

大谷九右衛門殿

荒 志摩

## 立紙之分

今度時服被遣為御礼、当地被参由ニて、前刻は入来、塩炮一器給、令満足候。令他出不能面談候。将又、過日は磯竹百合草、并花入竹給、令祝着候。恐々謹言。

七月晦日

御名乗御書判御座候

一、勝房江府滞留中御願申上候長崎貫物問屋之儀、其手之御役所江罷出、御歎申上候様、御公儀寺社御奉行様御決評ニ付、則九右衛門罷出候様蒙仰、尤、御使者御添被為下候御事、勝房差上候願書御覽被遊候。以後、九右衛門御公儀江御奉公之筋有之哉否、御聞糺被仰出、御答申上候口上書。

# 竹嶋渡海由来記抜書

乍恐口上書を以奉申上候

一、此度口上書を以、御願申上候。長崎貫物割符連中へ御指加へ被下置候様御願申上候二付、先祖より御公儀江何ニても御奉公之筋不相見候、御奉公之筋も有之哉と御尋被為遊候二付、私共存寄、乍恐奉申上候。私先祖甚吉と申もの、廻船数多所持仕、諸国江荷物積廻渡海仕候海道にて、右之竹嶋見出罷帰候処、伯耆国為御仕置、阿倍四郎五郎様被為遊御越候節、右之竹嶋へ渡海仕度旨、村川市兵衛と申合、四郎五郎様江御伺申上候処、其旨御聞届被為遊、左候得は、江府へ罷出、御公儀江御願申上之旨、被為仰付候二付、先祖之者共、当御府江罷出、御願申上候。天道ニ相叶、嶋渡海之儀、願之通被為仰付候御奉書、新太郎様江相下、則、從新太郎様先祖之もの共、右之御奉書頂戴仕、嶋渡海仕、難有仕合奉存候。其後、大猷院様御代、竹嶋之海道にて、又松島と申嶋を見出し、御注進奉申上候得は、竹嶋之通支配御預ケ被為遊、右両嶋へ渡海仕来、重々難有仕合奉存候。依之、寛永年中、西之丸御普請之節、御大恩為冥加之寸志之御願奉申上候竹嶋梅檀御床板御書院之御棚板被為仰付、奉畏、兩人之もの共、御用御板之御供仕、当御地江罷下り、乍恐奉指上候。首尾能御上納奉申上候。然処ニ、元禄年中、右竹嶋へ唐人相渡り初申候ゆへ、御注進申上、依之、右之段日本之御仕置を以、朝鮮国江被仰遣、其上、唯今迄之通、渡海可仕旨被為仰付候ゆへ、元禄六七年迄渡海仕候得共、年々唐人大勢相渡申候。委細之儀は、別記ニ奉書上候通ニ御座候。然上にて、又々朝鮮国江被仰遣、朝鮮国王より右竹嶋日本之御支配ニ相違無之旨、御証文御取附被為遊候上にて、右私共頂戴仕候御奉書御改被為遊候旨、被為仰付、奉差上申候。其上にて、渡海之儀以来御制禁之旨、伯耆守様迄御奉書相下り候御事。元来私共先祖之もの、右嶋見出し御注進申上候故、日本之御支配ニ被為遊候様、乍恐奉存候。右之通ニ御座候間、乍恐被為聞召訳、御慈悲を以、願之通被仰付被為下候得は、難有奉存候。以上。

伯耆国米子町人

大谷九右衛門

寛保元酉年六月十日

長崎御奉行所様

御役人中様

右之通、御答書差上申候事。

一、上野宮様江由緒之儀へ、九右衛門勝房舍弟藤八と申もの、京都ニ住居仕候処、不思儀発達職元司と成り、徳田主水と号、公家様方余多御館入、御指南申上、就中清水谷前大納言様・同中納言様蒙御懇意罷在候二付、右徳田氏取持にて、勝房御出入悉奉蒙御懇意、其上勝房江戸表罷下り候刻、右御両君様より日光宮様江、勝房身分之儀御頼之御直筆御書可被仰付旨蒙仰、難有頂戴仕、勝房江府へ罷下候頃は、元文四年末ノ九月五日上野江登山、諸太夫大西淡路守様江懸御目ニ、清水谷御両君様御添書差上申上候処、良有御坊官・万里小路民部卿様御出、右之御両通御請取被成、則宮様江御差出之事、其翌六日勝房上野御殿江被召出、家筋・由緒等御取調之上、則御坊官万里小路民部卿様御出、右之御両通御請取被成、則宮様江御差出之事、其翌六日、勝房、上野御殿江被召出、家筋由緒等御取調之上、御坊官民部卿様より、其方儀、京都御外戚清水谷前大納言殿・同中納言殿より宮様江御直書を以、御頼被仰越候二付、則御出入被仰付、其上御目見之儀、明七日宮様日光江御登山被遊候間、還御以後可被仰付旨被仰渡、其翌十月十五日、宮様御目見被為仰付、首尾能相勤、難有仕合奉存候。尚亦、其翌年申正月廿六日、年始之御目見被仰付、則元文五年より延享改元子年迄五ヶ年之間、毎年正月廿六日御定日にて、年頭之御目見申上候事。勝房江府江長々逗留仕、御公儀江御願之筋有之ニ付、從宮様御公儀寺社御奉行牧野越中守様江、龍王院之御院家為御使、九右衛門願事之筋御頼ミ被為添御言葉候之上、則牧野様より右御頼之筋御許容之旨、御請申上來候由、御坊官民部卿様より御書を以、被仰渡、尚又因伯之御太守様江も御頼被遊被為下度之旨、尊命相下り候趣、全く清水谷御両君様より御頼被為遣候て、右様高太之奉蒙御慈悲候様罷成、冥加至極、難有仕合奉存候事。

一、寛保元年酉十二月、上野從宮様、勝房家之儀、因伯之御太守様江護法院之御院家を以、御頼込被為下候。御請開之御次第、左之通。

護法院

万里小路民部卿

以手紙得御意候。然は、兼て御存知被成候通、大谷九右衛門事、京都御外戚清水谷前大納言殿江、御心易御出入仕候ゆへ、彼御方より御頼有之、宮様江も御目見等被仰付候事ニ御



座候。此度九右衛門公儀江願之筋相濟、国元伯州米子へ罷歸候由、就夫、九右衛門儀米子之御城主不相替、只今迄之通り万事御憐愍之御申付被遣候ハ、宮様御悦可被思召候間、此等之趣、無急度貴院より御壇家御役人中迄、右之趣宜御申入可被成候。以上。  
十二月十八日

一、同月廿七日、上野從御殿御坊官、御召状到来、其御文言左之通。

大谷九右衛門殿 万里小路民部卿  
以手紙申達候。然は、御自分事、相模守殿江御頼之儀、御宿坊を以、護法院此度被仰入候処、昨日蓮花寺五郎八と申仁を以、護法院まで御承知之由、御内証御請申来候。因茲、右之趣申渡儀有之候間、今明日中、上野御本坊迄可被相越候。為其、如斯候。以上。  
十二月廿七日

松平相模守殿より  
宮様江御請口上之趣  
此度、大谷九右衛門儀、御頼被為遊候趣、承知仕、畏奉存候。

一、九右衛門儀、  
御公儀江御願申上候儀も御座候。此已後右等之儀相願候へは、役人共評儀仕可遣之由、津田周防より内々にて、護法院迄之口上候。

勝房、延享元年子秋、鳥府迄江戸より罷歸滞留中、前記之通、殿様御在国年頭御目見願之通御聴届被為仰付、則其節御役人山岡次右衛門様・大嶋平右衛門様御勤中之御事。右御目見御聞届之儀は、於御国御役所蒙仰候得共、上野從宮様被為添御言葉候段、御承知被為遊候之旨、御沙汰無御座候二付、其年も鳥府二越年、御窺罷在候所、翌丑四月十二日、御屋鋪様より御召状到来、左之通。

大谷九右衛門殿 牛尾金石右衛門  
御用之儀有之候間、明十二日四ツ時、御館江可被出。已上。  
卯四月十一日

其翌十二日四ツ時、勝房御館江罷出候様、御切紙を以、被仰渡、其御書写左之通。

其方儀、上野宮様被為添御言葉候段、被成御承知候。其旨、相心得可申候。

一、勝房江府江相詰、連年御公儀江御愁訴申上候得共、本願長崎貫物問屋割符連中之儀被仰付置候御年限中故、時節相待候様、尤三ヶ津其外御領ニおいて、御上之御為、其身之潤ニも被成候儀考付、願出候様被為仰出、種々愚案巡、江府滞留仕罷在候処、勝房儀、米子町大年寄役勤中ニ付、急御呼返被仰付之旨にて、勝房倅庄九郎御差向、御国命難默止、無是非一先ッ帰国再参府と、志半勝房急病にて死去、因茲万事道絶、尚身代衰微仕、微力にて、江府相詰、御愁訴申上ル儀不相叶、及中絶候。右之仕合故、御差留は無御座候得共、乍恐公方様江参勤独礼之御目見始、御太守様御在国之節、年始之御目見被為仰付来候得共、奉中絶仕、重々奉恐入罷在候事。

右、竹嶋渡海由緒之儀ニ付、未夕書類等数多所持仕候得共、先年より差出来候粗書抜御座候。前記申上候通、私先祖之者、元和四年より元禄九年迄七拾八年之間、竹嶋渡海、其功を以、乍恐公方様・御太守様江も御目見、并御時服等拝領被為仰付、殊ニ家録として魚鳥口銭取被仰付、家名相統仕、難有仕合奉存候。并正徳五年以来、魚御用相勤来候所、乍恐、中将様御滞城被為遊候節、倅善右衛門儀、御用魚類為御窺日勤仕候二付、御提灯拝領、元治元年子十二月八日、甘鯛奉献上仕候処、思召も被為在候得共、御陣中之御事故、同月十五日先ッ御酒御肴被為仰付旨、翌年元朝為若魚鱒奉献上候二付、正月五日、又々御酒御肴奉頂戴仕、尚又、代々帯刀御免被為仰付、冥加至極、重々難有仕合奉存候。以上。

巳二月

大谷九之右衛門